

NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人
長野都市経営研究所

Vol.57

2018.APR.

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 http://www.nupri.or.jp E-mail : nupri@nupri.or.jp

NUPRI 全体懇談会

長野オリンピックピツクから20年

自分たちの活動に胸を張り

新たな飛躍を

平成30年2月21日 午後2時30分〜 長野ホテル犀北館にて開催

【全体懇談会 報告】

全体懇談会は岩野事務局長の司会により進行。各部署・委員会の代表から、昨年度の活動報告ならびに今年度の活動方針、現在進行中の活動内容について発表が行われました。

理事長あいさつ

■地域に貢献する活動に誇りを持って

市川浩一郎理事長



会員の皆様には日ごろNUPRIの活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。
ちょうど今、平昌五輪が行われており、連日の日本人選手の活躍から目が離せない状況です。今大会はメダルラッシュで、20年前の長野五輪を上回るメダル獲得が期待できそうだと言われていますが、表彰式会場でのメダルセレモニーを見るにつけ、長野五輪でのセントラルスクエアのにぎわいを思い出します。JOCの「表彰式会場は市街地で」という要請に応え、セントラルスクエアを表彰式会場にすることを実現させたのは我々NUPRIでした。開会当初はまったく人が集まらず、住民自治協議会に動員を依頼したのですが、スピードスケートの清水選手が金メダルを獲った途端、全国からあふれかえるほどの人が訪れ、地域の人々が入場できなくなつてもめるなど、いろいろなエピソードが懐かしく思い出されます。それにしても、小さな組織である我々NUPRIがあれを成し遂げたことを、あらためて誇りに思うわけです。

今年度も、新旧さまざまな事業が計画されています。皆様のご協力をお願いするとともに、地道ながら地域の活性化に貢献し続けているNUPRIの活動に、ぜひ胸を張って取り組んでいただきたいと思います。

去る2月21日、「NUPRI全体懇談会」が役員・会員あわせ50余名の出席により開催されました。折しも韓国平昌の冬季五輪で日本選手のメダルラッシュに沸くさなかの開催となり、20年前の長野冬季五輪当時のNUPRIの活動を振り返ると同時に、新たな時代の活動を模索する絶好の機会となりました。
またこの日は、今年4月に開校する長野県立大学の安藤理事長、金田一学長を来賓にお迎えし、長野市の新しい可能性に触れる契機ともなりました。
活動報告の後、元総務大臣、元鳥取県知事で、早稲田大学公共経営大学院教授・片山善博氏の講演会を実施。その後の懇親会では、長野市の活性化について熱のこもった意見が交わされました。

部会活動中間報告・ 2018年方針発表

■観光母都市ながの部会

「オリンピックレガシー」の再認識



市村部会長

平昌五輪で、日本のメダリストたちが口をそろえるのが「長野オリンピックを子どもたちに見て、あこがれて選手になった」ということです。長野五輪当時に流行った「オリンピックレガシー」という言葉を、私たちはすっかり忘れていましたが、彼らの活躍や言葉にそれを感じています。これは一朝一夕に育つものではありません。オリンピックは大会というイベントそのものより、地域に根ざしたスポーツ振興のスタート地点としての価値が大きく、しかもそれは時間を経て発揮されるのだということをおぼろげに実感する次第です。

NUPRIとしても、長野五輪20周年の節目の活動としてオリンピックにまつわるものを行うことで、現在、ギネスをとれるような巨大な「トーチ」の制作、設置を企画計画中です。また、インバウンドが加速するなか、夜の長野の魅力を発信したいと話し合いを進めています。皆さんのご知恵もぜひお貸しください。

■花遊歩く牛に引かれて善光寺参りく

JRとのコラボレーションで新展開



鈴木事務局次長

長野五輪当時、私はN.A.O.C.に出席しておりました。20年を経て開催されている今回の平昌五輪を感慨深く見ながら、あの長野の感動とにぎわいを再びと思う今日このごろです。

「花遊歩く牛に引かれて善光寺参りく」はすでに6回開催し、昨年は宿泊プランも企画しましたが、集客の困難さに直面しました。そこで今年度はJR「大人の休日倶楽部」とコラボを図り、着物をツールとして長野・上田・松本を10月20日から2泊3日めぐり、各地の活性化に寄与しつつNUPRIの知名度アップにも貢献するモデルツアーを開催する計画を進めています。また、その前段として「大人の休日倶楽部」主催で東京・万世橋にて着物を通じて長野・上田・松本を学ぶ講座を9月に3回開催を予定しています。

■ここ掘れ！長野調査隊

長野市をもっと知ろう！

知っているはずの長野地域を、独自の視点

竜野隊長

から新たな発見とともに知ろうという企画で、昨年は10月に県立歴史館の山浦学芸員を案内役に「橋めぐり」ツアーを実施し、好評をいただきました。今後も長野の魅力を掘り起こす活動を展開する予定ですが、今年度の具体的計画は、現時点では未定です。皆さんのご意見、ご希望もお聞かせください。

■中心市街地活性化活動

次の御開帳を見据えながら



清水理事

中心市街地の活性化については、イトーヨーカドーを中心とした善光寺エリアの再開発の動向を注視しつつ、NUPRIとして何が出来るかを検討中ですが、なかなか進展していないことを心苦しく感じています。次の御開帳を見据えながら、施策を模索したいと考えます。皆さんのご提案にも期待します。

■新産業創出部会

「農業可能」を継続して実践

「りんごの木オーナー制度」は生産者である三水の宮本さんと組んで18年を迎えます。昨年は念願の法人化を果たし、「農地所有適

竹内部会長





鷺澤部会長

J2昇格を願い、スタジアムで観戦を！

■スポーツ振興活動部会 AC長野パルセイロ支援活動

毎週月曜日に表参道式番館のプロムナードで開催している「採れたて野菜市」も12年が経過しましたが、こちらも後継者問題が深刻です。出店者を新規募集するなど継続への努力を続けていきます。農業が長野市中山間地の産業として可能であることを今後も実践で示していきます。



AC長野パルセイロトップチームは3月10日にシーズン開幕、ホーム初戦は3月21日となります。レディースは3月21日開幕、ホーム初戦は3月25日です。ぜひ多くの皆さんに「長野Uスタジアム（南長野運動公園）」に足を運んでいただきたいと思えます。

昨シーズンは残念ながらトップ、レディース両チームで観客動員数が前年を下回ってしまいました。今季こそ、トップチームのJ2昇格が実現し、祝賀会をNUPRIとして開催できるよう、応援していきたいと考えます。皆さんのご協力を何卒よろしくお祈りします。

■わいがやサロン

長野県立大学開校による活性化を期待



岩野事務局長

このところ、やや低迷が続いています。しかし、この春開校の長野県立大学の後町キャンパスがすぐ近くにあることから、コラボレーションによる新たな展開も期待できます。ぜひ楽しみにいただきたいと思います。

事務局より

「ながのシティプロモーション実行委員会」の解散に伴い、NUPRIとしての活動も終了した旨が報告されました。あわせて課題の多い市街地の活性化に関し、会員にアイデア提案を募る旨、呼びかけがありました。

平成29年度は2社が退会、2社が新規会員として加わった旨が報告されました。

来賓の長野県立大学の安藤理事長、金田一学長より、

大学の紹介とごあいさつをいただきました。



安藤 国威 理事長

本日はお招き感謝します。長野県立大学は地域に開かれたオープンキャンパスを目指しています。建物もそれに基づくオープンな設計になっています。

私たちはここで「グローバルな視野を持った、地域に貢献するリーダーを育成する」ことを目的に、少人数制、全寮制、全員留学といったユニークな体制で、徹底的に鍛え上げる教育を展開します。地域を学ぶことにも力を入れ、地域にとどまり、新たな産業を創造する人材を育てていきます。後町キャンパスには「ソーシャル・イノベーション創出センター」を配しました。学生が早くからコミュニティと関わりをもつて、肌感覚で社会貢献を理解すると同時に、産官学の連携を通じて、この街を住みやすく、素晴らしい街にしたいための場になると考えます。NUPRIの姿勢とも合致する部分が多く、今後、協働できる場面も多いと期待しています。



金田一 真澄 学長

学長に就任するにあたり、地場に軸足を据えて生きようと、住民票を長野に移しました。長野県立大学は、グローバルな視野を持ち、長野に軸足を置いて活躍する人材を育てます。まずは私自身からと、長野の住人になりました。

後町キャンパスに足を運び、「ソーシャル・イノベーション創出センター」を訪ねていただきたいと思っています。センター長には地域振興で実績のある大室悦賀教授にお願いし、スタッフにもそういう方々ばかりです。小規模な大学ではありますが、このセンターは非常に大きな価値のあるセンターであると自負しています。皆さん、ぜひ外から来た先生方と言葉を交わして、ともに地域の未来を考えましょう。そして、学生達の輝く目を見てください。

第一期生をどう育てるかが、大学の評価を決めます。皆さんのご意見やご希望もぜひお聞かせください。

NUPRI 講演会

真の地方創生と

門前まち長野の可能性

早稲田大学公共経営大学院教授 片山善博氏

全体懇談会に続き、片山善博氏の講演会が一般公開で開催されました。片山氏は阿部長野県知事の東京大学、自治省（現総務省）の先輩にあたります。総務大臣、鳥取県知事時代の経験や自身の旅の印象なども交えたお話は具体的に興味深く、長野市の活性化への示唆に富む内容で、集まった150名あまりの聴衆が深くうなづく場面が何度もありました。約90分の講演を抜粋掲載します。

日本のほぼ半数が

「消滅可能性自治体」？

長男家族が松本市民で、孫たちもいるので、長野県は私にとっても身近な存在です。新幹線も中央線もよく利用しますし、妻と山歩きをするのも楽しみの一つです。そんな親しみを感じる長野県の長野市という都市の活性化につきまして、外の人間である私の印象も交えながらお話をしたいと思います。

ある団体が5年くらい前に行った将来調査で、2040年ごろになると機能を維持できなくなる恐れのある地域の名前を具体的に挙げ、「消滅可能性自治体」と名付けました。

名指しされたのが日本の自治体の半分くらいにのぼり、動揺が走りました。私が知事を務めた鳥取県では19自治体のうち6つ、長野県は半分弱の34市町村が名指しを受けました。人口が減っていることは当事者が一番分かっています。なんとかしよう并希望をもつて取り組んでいるのに、「消滅可能性自治体」とは、ずいぶん無神経です。腹が立つというよりも意気消沈した自治体が多かったことでしょう。

地方でも長野市をはじめ県庁所在地には人口が増えているところがあります。しかし、決して自前の増加ではなく周囲からの流入によるものです。どこもその都市だけ独立して他と無縁で生きているわけではありま

せん。周りの人口が少なくなって活力が衰えれば、いざれ流入する人もいなくなる。今、人口が増えている自治体も周辺の地域と同じ認識をもち、地域全体として地方創生に取りかからなければなりません。

地方創生の狙いとは

無関係な施策

ともあれ、多くの自治体が人口減少に悩み、何とかしなければいけないと考えている時に、安倍首相が政権の主要政策課題として2010年10月、地方創生という目標を掲げました。地方の人口が減らないようにするため、これからの地域を支えていく若い人に

【片山 善博氏 プロフィール】

1951年岡山市生まれ。74年東京大学法学部卒業、自治省（現総務省）に入省。99年鳥取県知事（2期）。2007年4月慶應義塾大学教授。10年9月～11年9月総務大臣。17年4月早稲田大学公共経営大学院教授。あわせて鳥取大学客員教授、日本郵船株式会社社外取締役、「デジタル文化財創出機構」理事、「日本司法支援センター（法テラス）」顧問などを務める。著書に『片山善博の自治体自立塾』『地方自治と図書館 地方再生の切り札』など。



もつと定着してもらおうことが狙いでした。具体的には出生率を上げるといことが一つですが、これはすぐには実現しません。働き方、経済力の問題、住宅の問題など、いろいろ条件が伴うので、息の長い政策として取り組む必要があります。

もう一つは、東京一極集中を是正し、若い人たちが地方に魅力を持って住み続けることで地域社会を支えていく環境を作ることです。そのために国も自治体も総動員で、3年半の間、大金を投じてやってきました。赤字国債を積み増しし、リスクを負っても重要な政策として取り組んできました。

わずか3年半ですから見違える変化を期待するのは無理だとしても、希望の光が見えてきたとか、今までとは違った傾向が出ているなどがあったらいい。皆さんいかがですか。確かな手ごたえをお感じですか。その答えは日本中どこで聴いても「否」なんです。

これまで、地方創生として全国の自治体



は実にいろんなことをやってきました。そのもつとも典型的な例が「プレミアム商品券」でしょう。使った人は儲かった、良かったわけですが、これはそもそも市民にささやかな喜びを感じてもらおう政策ではありません。出生率を上げる、もしくは若者の人口流出に歯止めをかけるのが狙いです。プレミアム商品券を発行して出生率が上がりますか。若者の人口流出に歯止めがかかりますか。あり得ませんね。地方創生と言いつつながら本来の狙いとは関係ない施策だったから、成果が出ないのは当たり前なんです。ピントがずれています。なぜでしょうか。

地方の課題は 東京ではなく地方にある

今のお役人は、東京生まれ東京育ちの人が多いという特徴があります。私もかつて役人の立場でしたが、当時はどの役所も7、8割は地方の出身者でした。だから政策を

考えるとき、これが地方の実情にフィットするかどうか。本能的にわかり、議論したものです。ところが今は8割くらいが東京生まれ東京育ち。彼らに地方のことはわかりません。地方へは個人的な旅行か、出張で行くかです。出張で行ったその地方都市に降り立ったとします。県庁へ行くまでの通りがシャッター、シャッター……というところは珍しくないでしょう。官僚の多くは真面目です。何とかしなきゃと思うわけです。シャッター街の商店街をよみがえらせるには売れ行き

をよくしないと。それには地域限定の商品券なんかいいんじゃないか。それが起爆剤になり、消費が増え、にぎわいが戻って、後継ぎも帰ってくるのではないか。そういうことを頭の中で考えるんですね。

もちろん、商品券はやりたくないという自治体もありました。ある自治体では、姉妹交流している外国の自治体へ、中学生を募って2週間くらい行かせ、我が町のことを英語で紹介させたい。それに地方創生のお金を使いたいと言っていた。素晴らしいですね。ところが、その構想を県庁に持っていったら担当者に言われたそうです。「町長さん、今はプレミアム商品券です。そんな変なことやってたら後で面倒見てもらえませよ」と。こうしたことが多くの市長村で結構あったようです。

でも、国からの通知に書いてあったのは、それぞれの地方で、地方創生のために最も効果があることをやってください、それを政府は支援しますということだけでした。ただ、その下に「例えばプレミアム商品券」とありましたが、あくまでも例示です。でも結果的に、全国すべての自治体がやりました。「国がプレミアム商品券をやれ」って言ってるんだなと、県は読みとったんでしょう。まさに付度、まことに興味深い結果ですが、今後の施策が、またこんな愚かなことになってはいけません。

実は最近では官僚だけでなく政治家の皆さんも、東京生まれ、東京育ちの人だらけになっています。それが悪いわけではありませんが、彼らには田舎のことはわかりづらい。だからこそ地方は国の施策から一歩距離を置き、点検する姿勢をもつことが必要です。地方の課題は地域によって違います。地方の人たちが自らの課題を整理し、自分たちで解決策を考えなければいけないのです。



真の地方創生は 地域の課題解決から

今、地方は国際収支ならぬ「域際収支」の赤字に悩んでいます。なぜ赤字になるかというと、売るもの、つまり地域の産業があっても、買うものがより多いからです。

知事時代、鳥取県では白物家電を中心にした電気機械産業が稼ぎ頭でした。当時はサンヨー電気が元気で、下請けも多かった。また、農業では二十世紀梨が全国一の生産量を誇っていました。収入はそれなりにあったわけですが、エネルギー自給率がわずか7%で、支出が莫大でした。できるだけ地域にお金が入ってくる、もしくはお金が出ていかないようにする施策が必要でした。とはいえ企業誘致はなかなかうまくいきません。有名企業は引っ張りだこですし、



企業城下町になったとしても永続的とは言えません。新しい地場産品を開発して売るのがいいですが、競争に勝つのは容易ではありません。つまり外からお金を呼び込む施策は難しいのです。

一方、外にお金が出ていかないようにするためには、実はいろいろな手があります。鳥取では風力発電と小水力発電によってエネルギーを自前で生産することを考えました。東日本大震災の前で、電力会社などからは「自然エネルギーなんて」と、笑われました。当初は風力発電設備を3基建てるのがせいぜいでしたが、少しずつ、少しずつ増やして、今では県内各地に林立するまでになりました。もし今後、国から地方創生の予算が来るなら、風力発電やバイオマス発電などのエネルギー施策に活かすことが、有力な地方創生施策の一つになるでしょう。

他にも、最近各地で国の施策とは縁のない、真の地方創生に役立つ取り組みが出てきています。いずれも地域が自らの課題に

頭を抱えてきたからこそ発想し、実現できた取り組みです。「自分で考えるしかない」ということが、おわかりでしょう。

長野市民が長野市を 知ることによって観光に厚みを

長野市はどうでしょうか。観光は実に有望な産業分野ですね。新幹線も有名な善光寺もあり、有利な条件を持っています。しかし、地元の人は意外に地元の魅力を知りません。

無責任な私見を言えば、善光寺だってもっと魅力を発信できると思います。「牛に引かれて善光寺参り」のフレーズはあまりに有名ですが、もっと魅力的な参拝の動機となる要素が「お戒壇巡り」です。私は妻と二人で行って、本当に真つ暗で怖かったので手をつないで巡りました。今までにないくらいしつかりと。なんとか錠前にたどり着き、外へ出て、夫婦の信頼感がぐつと強く



なりました。以来、友人にもすすめています。「行けばわかるから、必ず地下へ潜れよ」とたいてい「ふーん」とか聞いていますが、実際に行って帰ってくると、例外なく「いやあ、良かった。夫婦の信頼感がよみがえった」と、感動して話してくれます。そういう話が伝わると、他の友人も「行くこう」となる。「夫婦の仲が良くなる」という物語が、観光都市としての一つの基盤になるんですね。

松代藩の財政危機を救った人物と言われる恩田木工も、この財政難の時代には、もっと注目されるべきでしょう。また、皆さんは、長野出身の憲法学者・宮沢俊義をご存じですか。最近、岩波文庫で著書が復刻されました。憲法がこんなに取りざたされている今こそ、その業績を掘り起こし、役立ててはどうでしょうか。いずれも直接的な観光政策ではありませんが、観光の背後にこういった歴史の情報があると観光に厚みが増し、訪れる人を魅了します。長野出身のいろんな偉人・先人・作家などをあらためて検証し、外から訪れる方に提供することも、地域の魅力を増すことにつながると思います。

市の具体的な活性化施策として「善光寺周辺の遊休店舗の利活用」とありますね。確かに重要ですが、これは結果論です。より多くの人が長野に関心を持ち、訪れるようになれば、遊休店舗は黙っていても利活用されます。観光PRといえば、ポスターを作って広告宣伝を企画して…となりがちですが、その前に内を固めることが大事だと私は思います。住民の皆さんがどれだけ地域の魅力を知っていて、それを自分の言葉で発信できるか、これこそが財産になるのではないでしょう。

繰り返し申し上げますが、地方創生には、自分たちの課題への解決策を考える実践的な力が不可欠なのです。

